

144. 湖東町小八木塚本古墳の調査

位置と環境

小八木塚本古墳は湖東町小八木地先に所在していた。一帯は宇曾川左岸の金剛寺山に連なる琵琶湖に向けてなだらかに降る地域である。本古墳の周辺一帯はその造営時は開墾の及んでいない土地であったらしく、集落等の遺跡は余り確認されておらず、古墳群として把握されており、当時はより西側の集落の後背地としての位置を占めていたとみられる。付近は現在は水田化され、往時の面影を偲ぶよすがはないが、点々として残る古墳や雑木林などが僅かにその余情景をなす。なお、本古墳の西50mには開口しているものの、墳丘・石室のほぼ完存する古墳が農道を曲げさせ、水田地にせり出した形で存在する他、周辺一帯には外形から、あるいは伝承という形で古墳地が点在し、また、東350mには前方後円墳と目される小八木東古墳が、さらに北東・東には祇園・平柳古墳群がある。

調査の経緯

本古墳の調査はは場整備に伴う事前調査であり、1980年4月～6月にかけて町教委の協力を得て、県教委、県文化財保護協会の手により実施された。調査着手時に古墳周辺は既には場整備事業が済んでいたが、本古墳上にはお地藏さんが安置されてその堂屋が営まれていたため当初はこの古墳も併わせて残され、水田内に張り出した形で残されていたのである。しかし、残念ながら地藏さんの御威光も、古墳の存在も田地利用の効率化の前にはすっかり色褪せ、地藏さんはすぐそ



1. 小八木古墳 2. 小八木東古墳群
3. 平柳古墳群 4. 祇園古墳群 5. 金剛寺野古墳群
6. 小八木廃寺 7. 妙園寺廃寺 8. 塔ノ塚廃寺
9. 金剛輪寺 10. 木戸口遺跡 11. 軽野正境遺跡
12. 今在家古墳群

ばの代替地へ、古墳は記録として残すということになり、発掘調査が実施されたものである。調査にかかる時点では古墳上には地藏堂が営まれていた他、その石室部を中心として2m程の盛り上りを示しており、明確に古墳であることは判明していた。内部については遺存度は悪いものとみられたが、調査の進展に伴い石室内についてはかなり遺存度の良好な古墳であるこ



古墳羨道から玄室をみる



西側周溝

とが判明した。以下、その石室内の調査を主として概
述しよう。

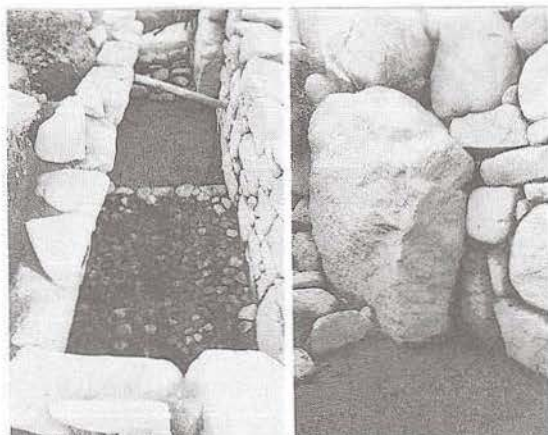
遺構について

本古墳は横穴式石室を主体部とする円墳であり、そ
れは径25m程を計るものであった。

周溝の調査 周溝は南側が現在の道路下で、また、
北側はほ場整備以前の道路でそれぞれ破壊、もしくは
埋められて調査が不能であったが、東、西側でトレン
チ掘りによりそれぞれ周溝を確認した。その結果、東
側周溝は幅2m、深さ0.8mで内部埋土は灰褐色砂泥
を主とし、また、西側周溝は幅2m、深さ0.3mで内
部埋土は黒褐色砂泥を主としたものであった。その周
溝の埋土や形状が異なるのは東から西へ傾斜する自然
地形によるものと思われる。また、古墳の前面には周
溝は囲っておらず外界との通路が設けられていた可能
性がある。これら東西の周溝間が25mを計り、弧を描
くことから径25mの円墳と推定した。

盛り土の調査 古墳は黄褐色砂泥と黒褐色砂泥を交
互に、あるいは、その混合土を搗き固めたもので外形
を形成している。また、石室は基礎石の据えつけに地
山を若干掘り下げて副え石や土による根固めを行い、
その後、石を積み上げて裏込め等を行い構築している。

石室の調査 石室はその天井石が殆んど取り除かれ
ていた以外は略々完璧に遺存しており、閉塞石も遺存
していた。石室は南に開口し、平面形は西側に袖のあ
る片袖式の横穴式石室で玄室は幅160cm、長さ512cmを
計り、その東側のラインに合わせて幅128cm、長さ288
cmの入り口部のやや開く羨道が付されている。玄室内
はその中央部で河原石の列により二つに分割される。
その後部奥壁寄りは一辺10~15cm程の河原石が一面に
びっしり敷きつめられ、その前部が土間であるのと好
対象をなす。以下、その敷石部を後室、土間部を前室
として記述する。後室の敷石は中央部にやや細かい礫
が敷かれ、その周囲はやや大型の河原石が敷かれる。
また、この敷石の直上には小枝等を焼いた灰が一面に
びっしり10~15mmの厚さで堆積していた。この灰・木
炭は敷かれたことは明らかであるが、いつ敷かれたの
かは明確では無いが、後述する出土遺物に火痕が無い
点から当初のものともみえる。湿気抜き、あるいは何
らかのマジカルな意味を持たすものなのか。この後室
からは東北隅に立て掛けられた鉄製大刀、金環、鉄製
直刀 $\frac{1}{2}$ 片、鉄製刀子、鉄鏃、鉄釘、あるいは南東隅に
短頸壺、北西隅敷石下に蓋杯の須恵器が出土した。前
室からは袖部から須恵器類（蓋杯3セット、無高台杯、
甕、横瓶、台付長頸壺、甕、小型直口壺）が、また、
中央しきり石付近から鉄製馬具、羨道とのしきり石付
近から鉄製馬具の一部がそれぞれ出土した。その出土
状態からみて前室の鉄製品と後室の鉄釘、金環が若干



石室全景（奥壁から）

袖部の石組



玄室中央のしきり石から奥壁を見る



西側玄室後部の石組み



その敷石を除き据えつけ状態を見る

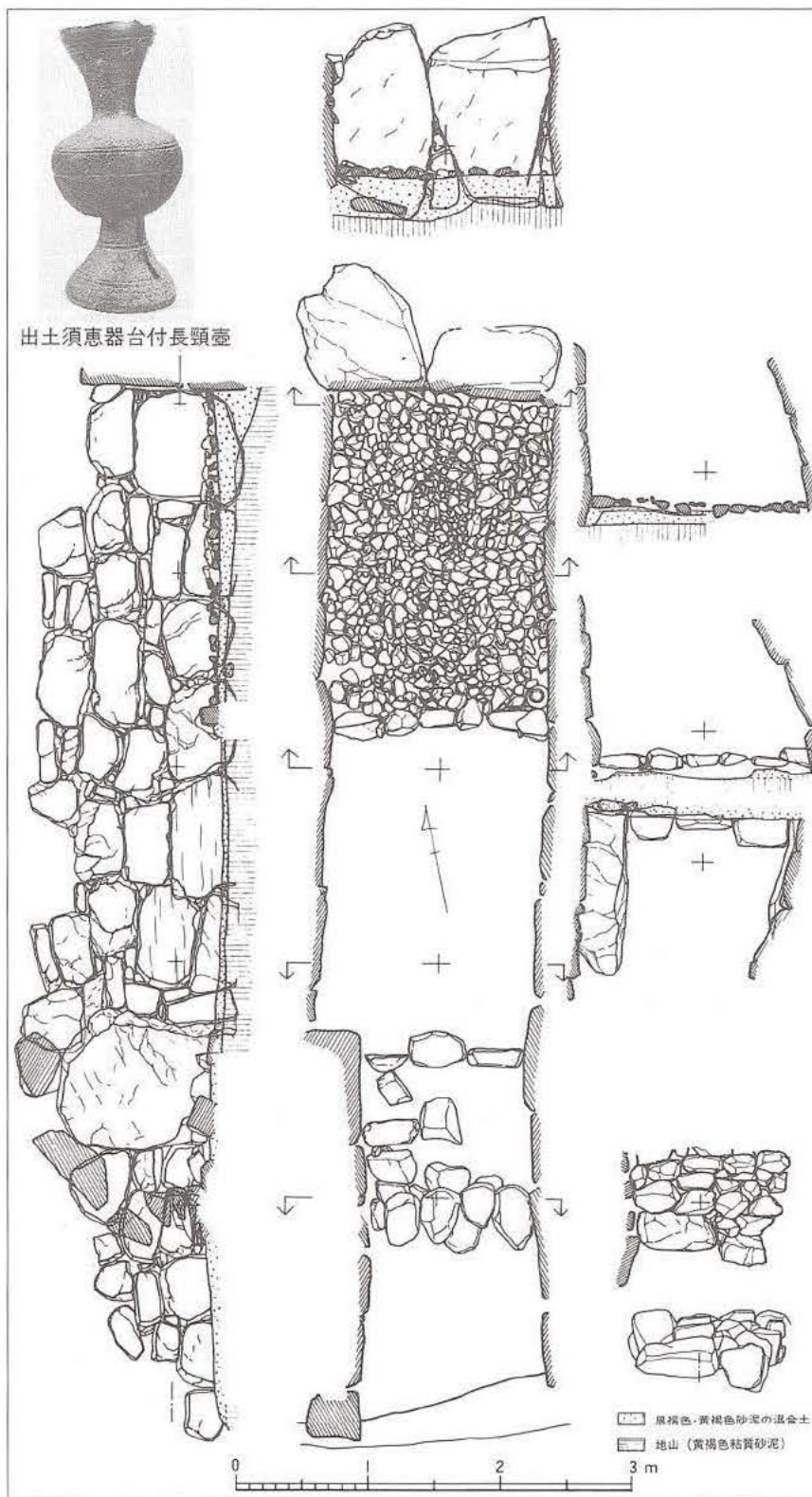


図1 小八木塚本古墳石室実測図

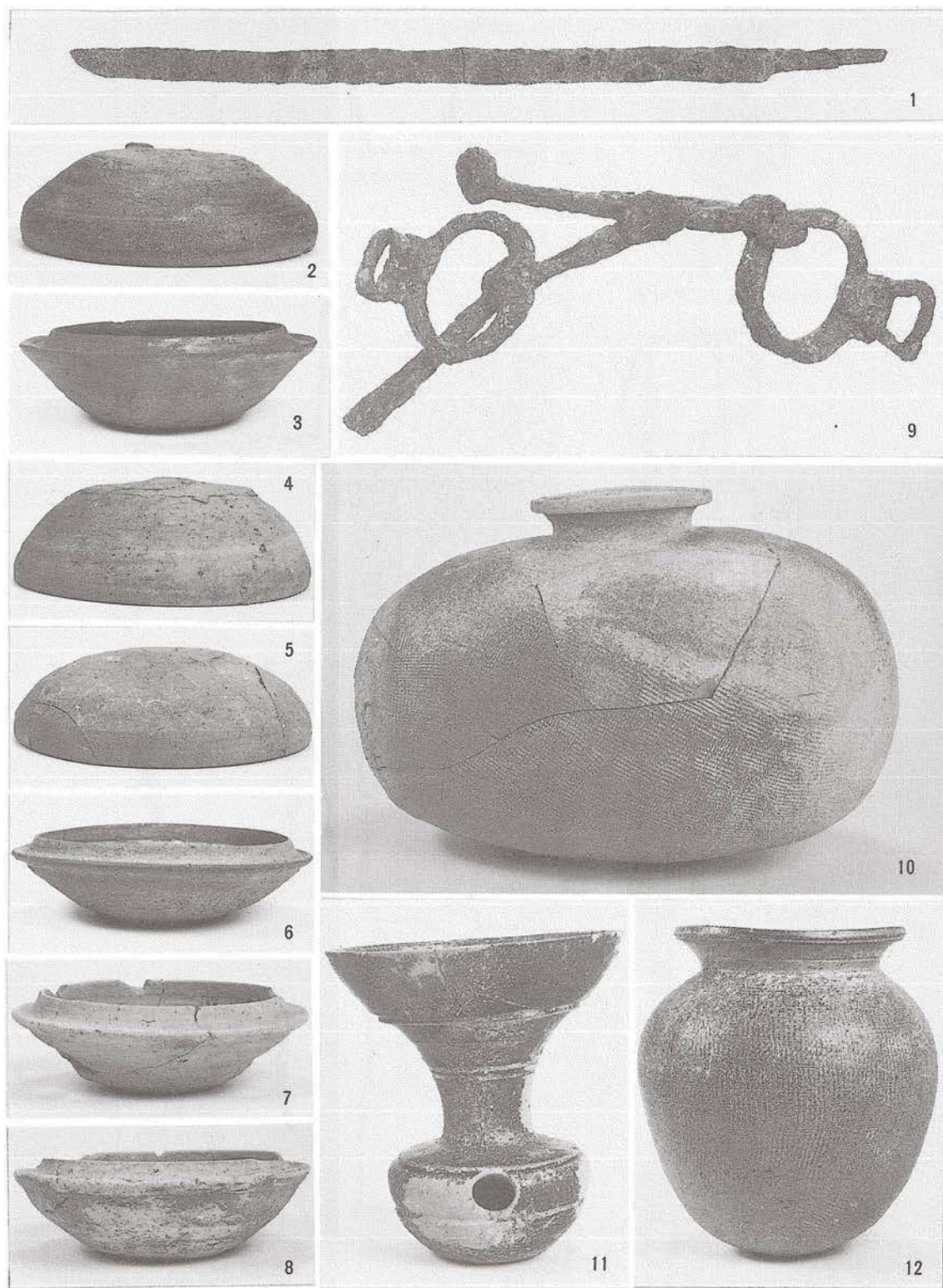


图2 出土遺物 1. 鉄製大刀 9. 鉄製轡 2~8, 10~12. 須恵器

移動している可能性がある他は略々原位置にあるものとみられる。各壁は大型の河原石（自然石）を使用し構築され、最も残っていた部分で高さ 140cm程あった。このうち東側側壁はその上部にかけて西側にかなりせり出していたがこれは天井石の除去のさいなどの後世の手によるものとみられ、西側側壁が略々垂直で上部はやや西側に後退しているのも同様の事情によるとすれば、側壁上部はやや内に向けてせり出していたと考えられよう。奥壁、袖石は共に巨大な石材を利用しており、袖石は方形にするための加工が行なわれている。また、この袖石に対面する東側にも巨石が立てて使われ、合わせて玄門としての意識がみられる。奥壁、側壁の根石はともに地山を掘り下げ、必要に応じて根固め石を使い土でぐるりを固定していた。天井石は一石遺存していたがそれは長辺 2.3m程の巨大な割り石であった。閉塞石は玄室側に面をつくっていた。

遺物について

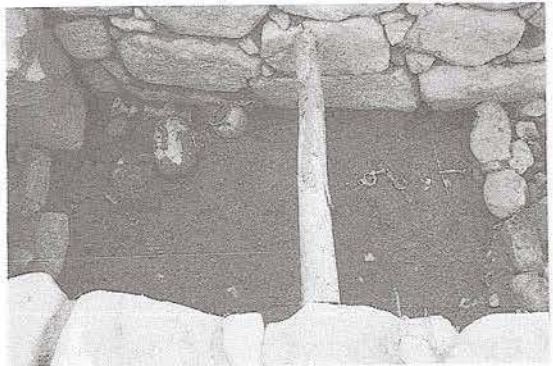
出土した遺物は先述のとおりで、以下、そのうち須恵器蓋環について概述しよう。蓋環は石室内で4セット出土しており、その作手に2種がある。1種は蓋天井部、坏底部にヘラケズリが施されゆるい弧を持つもので薄く偏平な形態で1セット出土し、1種は同部分がヘラオコシのあと未調整で平坦に近く、やや深い形態で、坏径10cm前後のもの2セット。同11cm前後のもの1セットが後室北西隅の敷石下から出土している。また、前室では上記の例から10cm程浮いた状態で無高台の坏が1例出土している。これは蓋環が逆転した後のもので、深く、腰に稜をつくる形態である。以上の例ではヘラケズリのあるものがやや古い様相を持つが、その他の例と大きな時期差はなく、他の須恵器類もこの時期のものである。また、無高台坏は一世代程の差があり、追葬などの行為が考えられよう。

考察

石室平面の規格について 石室の平面形は先述した如く片袖式で、羨道入り口がやや開く形態のものである。羨道部から玄室にかけては地の高低による差はなく、袖石と二列のしきり石によって内部分割が行なわれている。このうち南側のしきり石は袖石とのセットで羨道と玄室とを分割するものであり、玄室内の石列は後室・敷き石を設ける部分と前室・土間の部分に分割している。このうち後室は木棺用とみられる鉄釘や装身用の金環、大刀などの出土やその位置からみて棺座としての性格が考えられ、前室はその前庭として位置づけられよう。さらに付言すれば、この後室はその敷き石の大小や敷き方に差がある。即ち、その中心部にはやや小型の礫が密に敷かれており、それに対し、その周縁部はやや大型の礫が粗に敷かれるという具合である。こうした点と鉄釘が中央小礫部の周縁から出



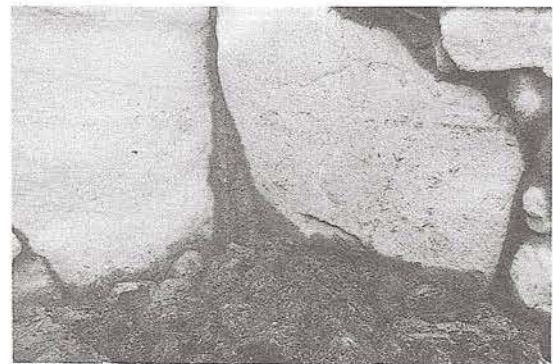
袖部から閉塞石を見る



玄室前部の遺物出土状態



同須恵器出土状態

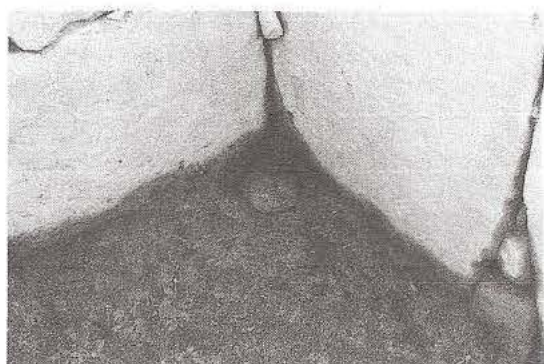


玄室北東隅に立て掛けられた鉄刀

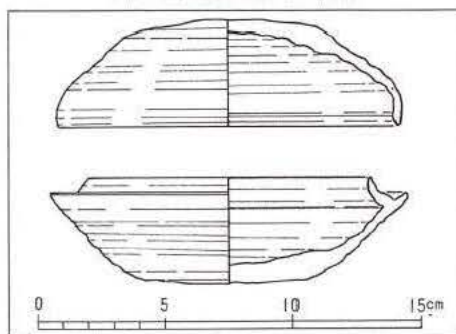
土し、また、他の遺物が中央部に置かれず周辺部に配置されている点から、恐らく、この相異は被葬者の木棺安置部＝中央小磔部とその周縁という関係になろう。

さて、以上のしきり石列や石室幅などから各部位の割りつけを考えると32cmという数値が1単位として割り出せる。これを単位として割り付け図化したのが図4であり、その基礎とした部位は奥壁ライン、玄室中央部しきり石列の幅、同列、羨道部しきり石列、袖石である。この図を要約して平面規模をみると玄室は長さ16単位(512cm)、幅5単位(160cm)、羨道部は幅を1単位減じ4単位(128cm)、長さは調査時は9単位(288cm)という数値が得られる。また、閉塞石もその積み上げの面の揃った部分(玄室側)がこの方眼にのっていることが判る。あるいはこの閉塞石も石室築造当初からのプランといえようか。また、この図からみれば袖石部がやや西側に寄っている。あるいはこれは石室築造のさいに巨大な石材の故にか袖石の据えつけが当初プラン通りにゆかず、それと共に周辺の石材の据えつけがやや混乱してしまったのではないかと推測される。以上から玄室内はきっちりと2分割されており、さらに、その寸法比は幅の3.2倍が長さということになる。

石室内遺物の配置について 遺物の出土位置は図3に示した通りである。このうち原位置(副葬された時点の位置)から大きく移動したとみられるのは羨道しきり石付近の馬具の一部であり、他の遺物は少々の移動とみられ、この分布が当初の副葬状況を示していよう。従って、その配置は基本的に棺周辺には身体装飾的な品々が、その前庭には祭器的・明器的な須恵器類が置かれるということであろう。また、北西隅敷石下に置かれた蓋環は棺とは視覚的にも外れるものであり、古墳築造の祭祀に関わるものかともみえる。それと対の位置の短頸壺は敷石と同時期に付されており、やはり他の須恵器とは別の意志があるろう。これら須恵器から当古墳は6世紀末葉を軸とした時期に築造、7世紀中葉に再び手が加わ



玄室北西隅蓋環出土状況



同須恵器実測図

ったことが判明する。

まとめ

以上簡単に調査結果について記述したが、本調査で石室の規模などについて多くの知見を得た。石室は宇曾川右岸の上蚊野古墳群の階段状石室でないことが指摘でき、その基準尺度として32cmという数値を得たが、こうした諸点が妥当なものか、付近の古墳との比較など今後さらに考察することが必要なことを付言してこの稿を終えよう。(松澤 修)

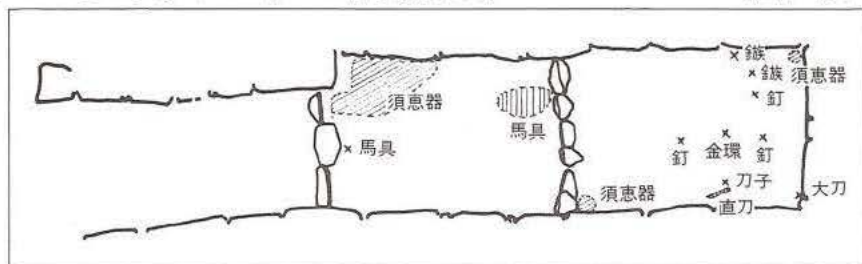


図3 石室内遺物分布図

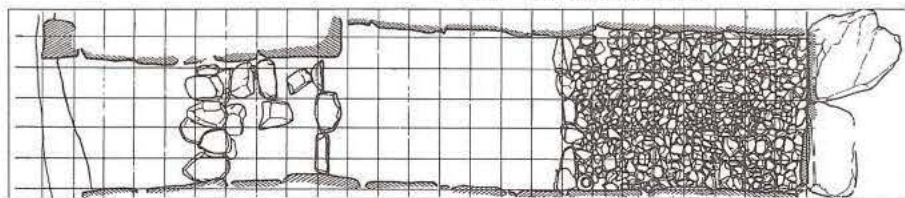


図4 石室平面地割推定図(一方眼は32cm)